

性格・情緒的な要因の多くは、環境的な背景によるところが多い。特に、親子関係・友人関係のゆがみは、性格や情緒的問題と関連が深いとされている。また、希薄な親子関係や友人関係のもつれも、不適應の原因となることがしばしば見られる。従って、上記の検査により、家庭環境や学校、学級における友人関係を診断することが大切である。

以上のように、問題行動の早期発見のためには、性格検査に加えて、親子、友人関係の検査を組み合わせ、問題要因を予測しながら、子供の内面の動きを具体的につかむことが大切になろう。

4. テスト・バッテリーを編成する有効性と限界

心理検査の組み合わせによって、ある問題行動は、分析的・総合的に診断することが可能になり、しかも、そのテストが妥当性・信頼性・実用性の高いものであれば、より客観的なデータが得られ、科学的な診断として価値のあるものになるであろう。

しかし、検査結果は、あくまでも被検者の成長発達途上における一時期、一断面で静止した状態での測定にしかすぎないものであり、全人格として把握することは困難なことである。従って、検査によって得られた資料は、行動観察や面接における主観的な判断のひずみを補正し、理解の不十分さを補って、科学的な裏づけ、より深い話し合いをつくる意味で行われるべきである。

5. 事例

(1) 学業不振児（中学生）

学校生活の中で、子供にとって最も深刻な問題は、「勉強ができない」「授業がおもしろくない」といったことなどである。学校生活の大部分が、授業で占められていることを考えると、当然のことであろう。

学業のふるわない子供たちは、学校生活全般の中で、不適應を起しやすく、そこから多くの問題を生じることにもなりかねないのである。

ここでは、学業不振の背景や、その指導のあり方を探るために、図2のようなテスト・バッテリーを編成して解釈や考察を試みた事例を紹介する。